

びぶりお



VOL. 10 NO.2

The University of the Ryukyus Library Bulletin

1977.12.10

二つのビブリオ

杉浦正輝

11月の初めに図書館の参考調査係から原稿依頼の電話があった。ビブリオ（図書館の定期刊行物）に載せるのだということである。以前、私は図書館長をしていたこともあり、二つ返事でおひきうけた。

何を書こうか、迷っていたときに研究室の大柿哲朗さんから「ビブリオとはどういう意味ですか」との質問をうけた。このことからヒントを得て、上記の題目で原稿を書きはじめた。

「皆様方はニッセキという言葉から何を連想しますか」。ある者（医療に関心のある者）は「日本赤十字」を、またある者（石油に関心のある者）は「日本石油」を連想するにちがいない。もっとほかのことを連想する者がいるかもしれない。数は少ないであろうが、「日本赤軍」を連想する者がいないとは断言できない。

人は知識・立場・関心・習慣などの違いによって、同じ物・同じ事を見聞しても全く異った解釈や判断を下すことがある。1つの例を紹介しよう。

商売の目的で、2人の実業家が未開地域を視察にいった。1人は靴が売れると判断し、もう1人は靴が売れないと判断した。全く逆の判断である。前者は、住民がはだしであるから靴が売れると判断したのであり、後者は住民には靴をはく習慣がないから、靴が売れないと判断したのである。

さて、「皆様方はビブリオという言葉から何を連想しますか」。図書に関心のある者ならば書籍（biblio=book, Bible）を連想するにちがいない。私は、今ならばビブリオから書籍を連想することも可能である。以前の私なら、ある種の細菌しか連想できなかった。すなわち、腸炎ビブリオ（*vibrio parahaemolyticus*）とかコレラビブリオ（*vibrio cholerae*）とかである。ビブリオ（*vibrio*）とは鞭毛を振動させて遊走する細菌類をいうのである。

毬米の言葉を仮名で書き、その仮名を発音する場合には、lとr、bとvなどの区別は現在の日本語では不可能である。大正時代には、bとvについては、少なくとも記載上の区別はあった。bは「ビ」vは「ヴ」と書いたのである。例えば、bookは「ブック」、violinは「ヴァイオリン」と書いた。

最近の日本語では、音の数が減っている。私たちは「イとキ」、「オとヲ」、「エとエ」、「ズとツ」、「ジとヂ」などについて発音の区別は全くしないし全くできない。したがって、漢字に送り仮名をつけ

る場合には、戸惑つたりもする。ビブリオという言葉の音を聞いても、字を見ても、biblioなのかvibrioなのか区別ができない。

日本語には同音異語がひじょうに多い。外来語を仮名で書いて日本語化することが流行している近頃ではなおさら、同音異語が増えてくる。日本語を記載のうえでも、発音のうえでも簡略にすることは語句を混同させ、日本語を不明瞭に曖昧にさせる。

私は近頃、「日本語の簡略化はほどほどにしなければならない」と痛感している。この理由は、他人に理解されないような簡略化は、まさに発音者や著者の「ひとりよがり」にすぎないからである。

(保健学部長 教授・生理学)

本学附属図書館にない資料の入手方法について

情報量の増大にともなって、情報や資料の収集には、莫大な金額を要するようになり、一大学図書館だけでは、収集できない出版物が多くなってきました。これを補なうために、国立大学図書館では相互協力が行なわれています。もしも求める資料が本学附属図書館にない場合は、次の3方法で資料を入手又は閲覧することができます。

1. 図書館間相互貸借の方法で図書を借りることができます。(雑誌は借用できません。)
2. 図書館相互利用の方法で、他の国立大学図書館へ行って、館内閲覧をすることができます。その際は本学附属図書館発行の身分証明書が必要です。身分証明書は図書館3階事務室内総務係(内線335)で発行しています。
3. 文献複写サービスを受けることができます。雑誌論文のコピーが主になりますが、単行本(図書)の一部分のコピーも可能です。図書の全ページ複写は原則的に著作権法で禁じられています。複写料金はB4版1枚につき45円です。

更に国立国会図書館の所蔵資料は、借用することも、複写サービスを受けることも可能です。

また、国内にない資料についてはBLLD(British Library Lending Division)に複写依頼をすることができます。

これらの申し込みに必要な用紙類は附属図書館5階の参考調査係(内線338)に用意されています。

BLLDの文献複写サービスの利用について

BLLD(British Library Lending Division=英国国立図書館貸出部)は1973年に設立され、Boston Spaに位置し、貸出し複写業務を専門とし、サービスの迅速さを誇っている。serialsが121,000 titleあり、この中currentなもの44,000 titleが購入されていて、世界中の重要な逐刊物の90%をしめているといわれている。海外に対する文献複写サービスも行っていて、専用のクーポン利用方式により極めて迅速に行われており、我国においても前記クーポンが国内にて購入できる途が開かれています。

複写サービスの料金

クーポン1冊(20枚綴り) 16,500円

クーポン1枚は下記のとおり適用します。

a) ゼロックスコピー10ページまで。

b) 引伸したマイクロフィッシュ10ページまで。

c) 35mmマイクロフィルム20ページまで。

d) マイクロフィッシュに撮ったレポート1点。

このBLLDへの複写依頼業務やクーポン購入業務は一括して図書館で行うことになっていますので、詳細については図書館5階、参考調査係(内線338)へお問い合わせください。

「マンガ世代」と図書館

嘉 数 啓

「青山会」というのがある。専門分野を異にする本学の教官、作家、主婦などが、毎月1回、安次富長昭先生宅で研究・座談を交す一種のインターディシプリナリー (interdisciplinary) な集まりである。大学人の自閉症ともいうべき専門バカを解消するにはいいチャンスだと思い、僕も2年程前から、ささやかな報告を契機に参加しているが、いまではすっかりこの会のとりこになってしまった。

いつの集まりだったか、大学生のマンガ熱が話のはずみに話題になったことがある。僕も種々のマンガ雑誌が店先に氾濫しているのは知っていたが、大学生が読むべき本も読まずにマンガのとりこになっているという話を聞かされて愕然とした。しかも大学院を出た助手までが、「少年マガジン」が店頭に出る前夜の木曜日は興奮して寝つかれないという証言を聞くに及んで、僕は驚きをはるかに通り越して、この「少年マガジン」なるものをいち早く読んでみようかと決意していた。

定価170円の雑誌を人目をばばかりながら買い求め、家族の者にも見られたらまずいと思って、自室に持ち込んでページをめくってみた。何んと！読むべきものはなにもない。大小様々なアクション画が、セリフ一つなく延々10ページ、60コマも続いているではないか。おまけに、「この物語はフィクションです。」と、わざわざ断り書きまでついている。だが、不思議なことに、いくつかの物語を余程心棒強く目で追っているうちに、画面が動き、音が出てくるのではないか。視聴者の意志とは関係なく、確かに音が出、画面が動くテレビと異なって、マンガの世界は自由自在に音を感じ、画面を動かせる世界なのかも知れない。画面一杯に飛び込んでくるいろいろな擬音は、若者のフィーリングと融合して、サウンドレス サウンドの世界を創造する。「ギユルルル………」と飛んでくるピッチャーのボールを「ブオン」と構えて「ガッ」と打ち、「ズザーツ」と塁にすべり込む。それに応えて、「ウヒョヒョ」、「ゲハハハ」の相手をあざけるような歓声が湧き上る。僕らが少年時代に愛読した武内つなよしの「赤胴鈴之助」や、堀江卓の「矢車剣之助」とは随合と異なった世界があるのだ。

このマンガを見ているうちに、僕がやっている経済学もこのように面白く学べないものかと考えていたが、最近になって、「マンガで学ぶ経済学」なるものがアメリカで登場し、日本でも紹介されて、学生ならぬ先生方に大モテであるという。さすがはアメリカである。

だが、マンガはあくまでもマンガである。マンガをいくら読んだところで知的レベルが向上するわけではない。図書館司書の松島さんからこの小論を依頼されたとき、僕は直ちに学生のマンガ熱と、図書の利用状況との関係を推察してみたのである。僕の推察は当たっていた。

「図書館年報」(昭和50年度)によると、学生の図書館利用は、ここ5年間一貫して低下の傾向にある。昭和46年に43,062人の学生へ57,261冊の本を貸出したのに対して、50年には29,384人へ40,352冊の本を貸出しており、その間の低下幅はそれぞれ32%、30%である。図書館の貸出し方針が厳しくなっていないとすると、これは学生の「図書館離れ」の傾向が強まっているとみてよい。いや、学生だけではないのだ。教官の図書館離れもまた着実に進行しているのである。欧米の大学図書館では、貸出冊数が蔵書冊数を上回るのが普通だが、わが琉大では蔵書冊数193,084(昭和50年)のうち、ほんの27%が貸出されているに過ぎない。勿論、あちらと直接比較するには種々の問題があろう。

蔵書冊数がある一定規模に達すると、図書利用率は低下しはじめるのが一般的な法則だが、琉大図書館の蔵書数は、年間2万冊強で増加しているとはいえ、Bクラス大学の標準に近い鹿児島大学の34%という貧弱さである。蔵書冊数は、大学の研究・教育活動水準の重要な指標であることから、同クラス、(規模)国立大学との早急な格差是正が強く望まれる。

学生の図書館離れは、指定図書制度の利用の低下と輪を一つにしている。50年の指定図書は、1.521

冊で、全教官の19%が指定しているに過ぎない。指定図書制度の利用強化は大切なことだが、学生が読みたいような本を揃えることも同じく重要である。「学生用図書」の選択に、どれだけ学生の意見が反映されているのであろうか。

図書館のあり方について僕のクラスで学生の意見を求めたところ、館内に頭を休めるコーヒールウンジのような場所があれば、ということであった。僕が学んだ米英の図書館には、コーヒーマチはもちろん、軽食もとれるラウンジがいくつかあった。とくに、ロンドン・スクールの図書館には、大小二つの食堂と、広々としたコーヒールウンジがあった。さらに驚くべきことには、閲覧室の真向いには、週1回、ロック演奏会をやる大ホールがあった。このホールからビートルズが生まれたと聞かされて、この静と動の奇妙なコントラストに感じ入ったのであるが、少なくともこの超一流の図書館を設計した人は、百年先の世代を視野に取り込んでいたのである。わが琉大図書館もやがて新キャンパスに移転する。欧米の制度がすべていいとはいわない。だが、せめて50年先の世代を考えて図書館の設計はなされているのであろうか。

学生のマンガ熱はいつかは必ず冷める。何故なら、マンガは知的渇きを満たしてくれないからだ。教官は自から読書をせずに、学生に「古典を読め」、「二宮金次郎を見習え」といっても始まらないのだ。第一、古典ほど読みづらい本はない。また、最近の学生はマイカー通学が多く、両手はふさがったままである。二宮金次郎がエンジョイした両手の自由はないのだ。

どんな鈍感な学生でも、教官の知的広がりやの深さを直感で見抜く力をもっている。学生が本を好きになり、図書館を好きになるためには、教官がそのための条件を創り出さなくてはならない。「脱マンガ世代」と対決する用意はできているのであろうか。僕自身の自戒のために。 (法文学部助教授・国際経済学)

———— 主要百科事典紹介 (その2) ————

フランス：—

Grand Larousse Encyclopédique, Tome 1-10 (1960-1964), Supplément, Tome 1 (1969), Paris, Larousse.

フランス文化にはディドロの偉業は絶対の重みを持っている。フランスの百科事典について述べる際にはディドロ (1713-84) の百科全書をあげなければならない。これは古くからわが国にも知られるものであり、もって「百科全書派」の異名をとった。フランス第一級の人たちの1人である。

ディドロの考え方をついだものは1886~1902に出版された「大百科事典」31冊である。

現代においてディドロの伝統を追うものは「フランス百科事典」21冊で、1935~69年の長年月をかけて完成した。その編集はコレージュ・ド・フランスの歴史学教授リュシアン・ポール・ヴィクトル・フェーヴルである。この事典はフランスの伝統である知識を編集者の哲学でシステム化した事典で、教養を高めることを目標にしている。

このフランスの学問的常識を破ったのは、ラルッスの「19世紀百科事典」15冊で1866~76年に発行された。

ピエル・アタナズ・ラルッス (1817~75) は田舎の小学校教師で、ソルボンヌ大学に学んで、1852年に出版社を開始して、国語教科書、やさしい文法、フランス語辞典に成功した。この国民教育的発想から百科事典の民衆化を企てたもので、小項目主義で図版を多く加え、自国の知識を加えた。彼はこの完成1年前に没したが、後継者の努力によって、辞典その他も大いに発展した。

終戦後「大ラルッス百科事典」10冊を1960~64年に発行した。徹底した小項目主義でカラー写真版と文化地図とは他の百科事典のおよばないところである。

フランス語の百科事典のうちで最も広く親しまれているのはラルッス系統のものであろう。そのうちでも規模の大きい最新の版は「大ラルッス百科事典」である。これは「ラルッス20世紀百科事典」の新版に相当し、間接的には、研究者の間で高い評価をもつ「ラルッス19世紀百科事典」を基礎にしている。

イタリア：—

Enciclopedia Italiana di Scienze, Lettere ed Arti, Vol. 1—35 (1949) Appendice, Vol. 1—3 (1950—1961), Indici, Vol. 1 (1952). Roma, Istituto della Enciclopedia Italiana.

日本では「イタリアーナ」で親しまれている「イタリア科学・芸術・文学百科事典」がある。ファシスト内閣の文部大臣哲学者ジュスティエーレの編集により、ファッション色が濃いが、文化的色彩の鮮かなもので、都市の歴史は1冊の単行本よりも豊富であり、ミケランジェロやレオナルドをはじめ、芸術家の評伝は単行本になったほどりっぱである。写真版はセピア刷で、さすが文化の栄えた国だと思わせる。1929～39年に本巻36冊と附録1冊を完成した。1949～52年に改訂版として、本巻35冊、補遺3冊索引1冊が完結した。National Encyclopedia の最高峯とされる。ムッソリーニ治下の傑作である。

スペイン：—

Enciclopedia Universal Ilustrada Europeo—Americana, Tomo 1—70 (1908—1930),
Appendice, Vol. 1—10 (1931—1933), Suplemento Annual, Vol. 1—15 (1934—1966).
Barcelona, Espasa.

最も大型の百科事典をエスパーサ・カルベ社（バルセロナ）が発行している。「ヨーロッパ・アメリカ図解世界百科事典」で本巻70冊、1905～33年に完成し、1943年には補遺10巻、附巻1冊を発行したが、1960年には補遺4冊と附巻9冊を加え、94冊となり、「図解世界百科事典」という。スペイン系人の伝記は特にくわしく、15万人を収め、世界中の地名、市名その他小項目が多い。図版16万のうちカラー3,000枚がある。これも Italiana 同様、またはそれ以上に包括範囲の世界的であること、bibliographies の詳しさ、各語の辞書的解説、世界の隅々にまで至る精細な地図と挿画、等の点で百科事典の模範とされる。“Espasa” の略称で呼ばれる。

アメリカ：—

The Encyclopedia Americana, Vol. 1—30 (1973), the International Edition, New York, Americana Corporation.

ドイツの政治家フランシス・リーバー（1800～72）はアメリカに亡命しているうちに「ブロックハウス百科事典」7版を翻訳し、若干を追加して「アメリカーナ百科事典」(1829～33) 3冊を発行した。小項目が多くアメリカ人の伝記もあるので好評であった。

19世紀末に「サイエンティフィック・アメリカン」編集陣が参加して科学技術で信用を得た。1918～20年に徹底的にデーターを検討して新版を発行し、30冊の大事典とし、アメリカを代表する百科事典となった。経営の合理化を図り、1923年から年鑑を発行して読者の便宜を図ったが、1936年には10年を1期として循環改訂増補を行なう方式を打ち立てて、各百科事典もこれにならうことになった。

今日では学術的性格をも兼ね備え、内容、規模ともに Encyclopaedia Britannica に比肩しうる百科事典に成長している。Encyclopaedia Britannica が伝統的にヨーロッパ関係の項目に重点をおいているのに対して、Encyclopedia Americana は当然のことながら、北アメリカ関係の項目を詳細に扱っている。

イギリス：一

Encyclopaedia Britannica, Vol 1—24 (1970). Chicago, Encyclopaedia Britannica, Inc.

英語の百科事典として、現在の百科事典界に不動の地位を占めている「ブリタニカ百科事典」は1771年3冊で初版が出された。この事業の金主は当時一流の銅版画家ベルで、挿画を一手に引うけた。出版責任者はマクファーカで、この事業の責任を負っていた。

ブリタニカは次第に発展して、第9版を発行した。この第9版は1875年から89年までかかり、索引とも24冊で完成した。この形式がその後のブリタニカを支配することになった。この事典の好評なためアメリカで海賊版が発行され、著作権をめぐる争い、ついにアメリカ書店と販売契約を結んだ。日本の丸善が1902年に「大英百科全書」として、予約販売をしたのはこの版であった。

第10版は9版に補遺11冊をつけて1902年に発行された。次の第11版は9版と並んでブリタニカの最高のものでありといわれる。しかしその完成期の1910～11年というのは第1次世界大戦の最中で、資金が続かず、各方面の援助でようやく破産をまぬかれた。世界大戦の結果をとり入れて、第11版29冊に補遺3冊を附して、第12版を1922年に発行した。さらに補遺3巻を附したものが、1926年発行の第13版である。

ランカシヤ繁栄を背に栄光を輝かしたブリタニカも、第11版以来の赤字は減ることはなかった。補遺を重ねて辿りついたがついに故国スコットランドと首都ロンドンを見棄てて、アメリカの出版社シアズ・ローバックに買収され、1926年遠くシカゴに運ばれた。同社は第14版24冊を1929年に発行した。そのときはアメリカ史上最大の不況時期で身動きができなくなった。幸いにも景気が回復して、危機を切抜けることができた。

この経済上の悪循環を断ちきるために、「アメリカナ百科事典」の編集法と経営手段を採用することにした。36年に毎年改訂にふみ切り、翌々年に年鑑発行にこぎつけた。1927年からシカゴ大学が編集を引受け、ロンドン大学とコロンビア大学も執筆協力することになった。1943年シカゴ大学に出版権を譲り、副総長ウィリアム・ベントンが社長になった。

第14版完結(1929)後も部分的には継続的改訂が行われてきたが、基本的には内容、形式ともに第14版を踏襲したものであるが、約3万4千8百に及ぶ学術的な項目は大項目を中心とし、8千名近くの執筆者によって書かれたものである。その執筆者のうちには40名以上のノーベル賞受賞者が含まれているといわれるだけあって、その顔ぶれは多彩である。しかし1974年3月に刊行された第15版(通称「ブリタニカ・スリー」全30巻)は全面的に改訂されている。また、ブリタニカの日本版として「ブリタニカ国際大百科事典」が1974年12月1日にはじめて刊行された。

以上のうち、イタリアの“*Italiana*”、スペインの“*Espasa*”は“*Britannica*”とともに世界の3大、あるいは“*Brockhaus*”を加えて、4大百科事典といわれてきた。本館には所蔵していませんが、その後ソヴェトの“*Большая Советская*”のような勝れたものが刊行されている。

こゝに外国の権威ある百科事典を紹介するにあたり、下記の図書を参考に致しました。又、紹介した6つの百科事典は5階の参考コーナーに備付られておりますのでご利用下さい。

- 参考文献 彌吉 光長：百科事典の整理学 竹内書店 1972
木寺 清一：図書館資料概説 明治書店 1969
長沢 雅男：参考調査資料概説一書誌と参考図書 三田図書館学会 1968
ブリタニカ国際大百科事典 TBSブリタニカ 1974

琉球大学附属図書館報 “びぶりお” 第10巻 第2号〔通巻第38号〕

昭和52年12月10日 発行人 平良恵仁 沖縄県那覇市首里当蔵町3丁目1番地

電話 34-0101(内線338)